

どんな暮らし方を
めざす？

使い捨てるモノに囲まれた暮らしではなく、

少ないモノを大切に使い続け、

お金より心の余裕を大事にする暮らしを

めざしたい。

「循環」や「再生エネルギー」の分野で世界中が動いている。この分野でトップランナーをめざすといったことをもっと意識した方がよい。

金持ちになって様々なモノを手に入れるのが豊かさだと思える一方、金をかけないで生活する、金のために働く時間をできるだけ小さくし、むしろ楽しみながら役に立つことをやりたいという人が増えるだろう。

循環、再エネ
でトップを
めざす

家の庭が広く、家庭菜園ができる。野菜くずなどはコンポストで再利用して生ごみを減らす。そんな暮らしが当たり前になってほしい。

環境負荷の低い素材である地域木材を利用した生活をしている。家は木造で、木材やセルロースファイバーでできた日用品を長く大切に利用する。そんな暮らしを広げたい。

地球環境を守ることが、生き物や人間を守ることにつながる。

今の生活は不要不急の「贅肉」にまみれている。それぞれがシンプルな生活を心がけるような世の中になるべき。

限りある資源を守るためにも、必要なものだけを選んで買い、食品などのロスをなくしたい。

一人ひとりが簡単なことを守れば、それが積みあがって自然環境保護につながる。

シンプルな
生活を
心がける

大人だけでなく、子どものころから自然について学ぶことにより、環境も変わっていくのではないか。

みんなが自然や環境に目を向け、世界的な課題を自分事として考えていかなければならない。

自然エネルギーを活かし、天然資源を計画的に使い、皆が社会へ感謝しながら働く、そんな新しいライフスタイルを模索する必要がある。

まち全体でその地域の特性を活かした自然エネルギーを使う社会に変えていきたい。

利用者の減ったゴルフ場を太陽光発電所にすればよい。

自然エネルギー
を活かす

自然を破壊するメガソーラーは禁止すべきだ。

電気を使わない生活を楽しむ文化を育てていくべき。

ドイツのシュタットベルケこそ日本の地域でやるべきことだ。これを一つ事業として走らせ、そこを拠点に住民サービスを提供する姿を作りたい。

自然には「美しさ」の側面も当然あるが、生物多様性、生態系サービスなど、自然の持つ多様な価値にきちんと目を向ける必要がある。

多様な共生関係が築かれた生態系は安定性・復元性のある環境と考えられ、人間も含めて非常に住みやすい環境と言える。

人間も自然の一部であることをもう一度自覚し、自然との共存を考え直すべきだ。

自然の持つ
多様な価値を
知る

ブルーカーボンとして海藻などに炭素を固定する海の機能がこれから大きく見直されていくはずだ。

尼崎100年の森は、公害を出していた火力発電所が森になったもの。そういう事例を増やしていくべきだ。

農業は多様な役割を担っていて、そのワンノブゼムとして食料を作り出しているという面がある。農業はもっと大きな位置付けで考えることが重要だ。

地域材が地域で回るようなサプライチェーンを構築して、環境に優しい社会システムをつくり、内外に発信していきたい。

県産木材を活用し、都市部でも木材に触れる機会を高めることができれば、林業を活性化することができる。

県産材を使った暖房を推進してほしい。

地域材を
地域で回す

奥山の杉・檜を伐採し、広葉樹、照葉樹の森に変えよう。

里山を整備することで、自然災害も獣害も軽減でき、海も元気になる。

山を良くすれば、川や海のプランクトンが豊かになる。地域を守ろうとすれば、山を守らないといけない。

どんな暮らし方を
望む？

五国の多様性を活かし、

ライフステージや個人の志向に応じた

いろんな働き方、暮らし方ができる

兵庫県をつくってほしい。

東京一極集中が一向に是正されない。国を信用しない、東京の方を向かないという決意があってもよいのではないか。

東京の突出度合いがどんどん著しくなり、一国二制度のようになっている。

コロナ禍の後も都市への人口集中は進むと思う。

大企業が都市部に会社・社屋を集中させ、そこに労働者を集める方式は改めるべき。

都市への
人口集中が
進む

地方に予算を投入するより、都市に集中投下したほうが地域は活性化する。

人口の移動はフリーなので、都市から地方に移動させようとしても、都市より大きな魅力がなければ地方には行かない。

経済が非物質化すると、人とのコミュニケーションから生まれるアイデアが経済価値を生む要素が強くなるので、都市集中が更に進む可能性がある。

年齢によって住む場所を変える
みたいなことを学生たちは考
えている。定住すること自体に重
きをおかない世代が多くなって
いくのではないか。

人生の岐路に立った時、兵庫県
に帰るといふ選択肢があると思
えるかどうかは、そこで自分の
人生を賭けられるかどうかでは
ないか。

自由に人が移動できるようにな
れば、住む場所を選ぶ基準は
「どこ」ではなく「誰と」住む
かになる。

定住に重きをおかない世代
が多くなる

今の人は住む場所を決める時に、
結構適当に選んでいる。本当に
したい暮らしをもっと考えて住
む場所を選ぶようになるのでは
ないか。

気の合う仲間がそれぞれの車
（部屋）で集まってきて、乾杯
してまた去っていく。そうした
お金のかからない結婚式や葬式
をする人が増えていくだろう。

社会の変化と家族構成の変化に
応じて、いい条件があれば、す
ぐに住む場所を変える人が増え
ると思う。

都市も田舎もそれぞれの地域が自立して、それぞれが互いを補完し合うという姿がよい。

都会も田舎も捨てない、両方手に入れる、良いところ取りしたい。

都市と田舎が
補完し合う

南海トラフ地震などの大災害のときに、田舎は大阪や神戸など都市のバックアップができる。そうした役割分担や連携をつくっていくことが重要だ。

都市と田舎が共に発展する必要はない。あえて発展しないことを魅力にしながら、便利な田舎をめざすべき。

開発しないことで、自然が残る。その自然があってこそ、地域の発展や生活に必要なモノを得ることができるのではないか。

これまで田舎イコールダサイだった。そのこと自体を変えないといけない。

どこにいても最新の情報に触れ、学べる時代だ。田舎が田舎なのは、環境の差ではなく、情報を取りに行かずにテレビか自分の身の回りで得られる情報で済ませていることによる。

すべての人に
開かれた田舎へ

田舎というと閉鎖的なコミュニティのイメージがある。すべての地域がすべての人に開かれた場所になってほしい。

田舎の開放性が大きな課題。不便だからではなく、排他的、保守的だから若い人が出て行く。多様な人々が集う新しい田舎を実現したい。

田舎が開放的になることができれば、必然的に都市から多様な人が移り住むようになる。

ものづくり県でありながら、瀬戸内海、日本海に面し、食材が豊富。自然豊かでリモートワークやサテライトオフィスに適した環境もある。この兵庫の強みを活かすのが「分散」だ。

自然を感じられて都市のメリットも享受できるのが、東京でも大阪でもない兵庫の良さ。自然と都会の融合を強みとして生かす手立てを考えるべき。

兵庫の特徴は
自然と都会の
融合

疎であることが足枷にならず、疎の人と密の人との分断も生まれない。そんな社会が望ましい。

都会に住まなくても仕事ができる時代だ。兵庫は仕事と自然の中での暮らしを両立できる県だ。

高速通信環境によって、国内外とつながるテレワークが県内どこでも可能になり、職住が融合する地域として世界的に名の知られた県になってほしい。

自然と共にある暮らしが人間の基本的な暮らし方であるはず。

自然と共にある暮らしをしているが、周りでは廃屋と休耕田が増えるばかりだ。

物質文明を追いかけることが良い社会につながる道という幻想が未だに生きている。

自然と共にある暮らし

住宅を間引いて過密を解消し、自然を増やすことで都会の殺伐とした雰囲気緩和できる。

大切な森林が一部以外荒れ放題。森林従事者を育成し、生業ができるようになっていくことが重要。

箱モノの開発を減らし、中長期にわたる自然回帰に投資を振り向けるべき。

自然、地球環境、人の心、暮らしなど、いろいろなものが「調和」する暮らしがもっと広がっているといい。

農業をみんながやることで、生きがいを得られ、リズムカルな暮らしにもつながる。

手をかけた分
だけ応えてく
れる野菜

県民皆農、みんなが農業のプチ知識を持ち、実践するようになれば面白い。

手をかけた分だけ応えてくれる野菜があって、それが生きがいや安心、自己肯定感につながっている。

田舎には、素朴で柔らかな雰囲気があって、地域に心を開いて思いやりを巡らせていくような、利他的な価値観を感じる。

都市から見れば、田舎の広い庭でゆったり過ごすことに大きな価値があり、そのような生活がこの地域ではできる。

田舎の山の中で、家族で農業を営む暮らしは、外の人からは、見ると癒やされる、ほっとすると言われる。

田舎こそ
クリエイティブ
の集まり

今まで田舎がデメリットだと思っていたことがなくなり、田舎の住環境の良さが見直される時代が来る。

都市だと何でも買えばよくて、与えられるという環境があるが、田舎は自分で考えて自分で作らないといけない。田舎こそクリエイティブの集まり。

今の若者には、課題が山積している地方こそフロンティアだ。

お金をかけずに気軽に別荘を持てる社会にしたい。選択肢として可動する家もあるし、そこにいくのに、自転車やミニバイクを使うなど、お金のかからないアクセスの方法もある。

安いマンションを買ってリノベーションして住む。モノは少なくてよい。本やレコードは全部データでよい。コストをかけずに「軽く住む」という方向性が生まれている。

持ち家にこだわる意識の変革が必要。

気軽に別荘を持てるように

戸建て庭付き駐車場付きか職住近接かという対比で考えると、今伸びているのは職住近接のライフスタイルに対応できているまちだ。

職住近接が子育てには大事。通勤時間は結局ロスでしかない。職場の近くで安心して子育てができる、そういうまちをめざしていく。

脱炭素の観点からは、遠距離通勤を要する集住型より、職住近接の分散型の方が望ましい。

ワーケーションは、新たなビジネスを起こせるとか、イノベーションを創出できるといった価値が認められないと長続きしないだろう。

ワーケーションが、やる人にとって意味があるだけでなく、地元の若者たちがビジネスを創出するきっかけづくりになれば面白い。

自然と共生することに価値を置く時代に合った選択肢を、働き方としても選べることはすごく意味のあることだ。

自然に近い
ロケーション
で働く

自然が近くにあるロケーションで、あらゆる場所でリモートワークができる、魅力的な中心部もある、このような空気感、イメージを打ち出して事業者の誘致をした方がいい。

リモートワークが広がるなか、都会へのアクセス、自然との共生、多様な第1次産業など、時代に合った生き方・働き方の選択肢を示すことが大切だ。

テレワーク中心になりつつある現在、都会に住む必要性を感じなくなってきている。

成り行き任せではニュータウンの再生は進まない。行政が入って、機能集約と自然再生を含めて計画的に維持更新を進める必要がある。

国が考えるコンパクト化は絵に描いた餅。コンパクトにできるところはもうしている。

都市機能は集中している方が縁辺部に住む人にとっても便利。

機能集約と
自然再生
を考える

集落が無人化してそのままになっている。原野に戻るだけかもしれないが、空間管理の面から考えると、まばらでも人がいる方が地域の保全につながる。

まばらに人が住み続ける将来を考えたとき、問題は水の確保。ぽつんと山奥に一軒家という場所が徐々に増えていく。奥地でも、家があったら水道は引いておかないといけない。

問題は公共施設や道路・橋の更新が追いついていないこと。そこをきちんとやらないと人を呼び込むこと自体できない。

人口が減っても道路、上下水道、情報通信は守っていないといけない。なかなか表に見えないが、持続可能なまちという意味で本当は一番大事な部分。

課題の一つは老朽化が進む公共施設の維持更新。将来世代に過度の負担を残さないことも住みやすいまちの大事な点だ。

公共施設の 維持が課題

人が減って自然とコンパクトになっていく中で、利便性、教育の質、子育て環境など核となる部分をどうやって維持していくかが課題。

これ以上開発をせず、空き家を有効活用して快適で安く住めるまちをつくるのが大切。

空き空間が使えるかどうかの分かれ目は「人の交差点になっている」かどうか。空き家を単純にリスト化するのではなくて、可能性がある場所とない場所の仕分けが必要。

日本各地の若年層から、移住先の第一候補として挙げられる地域をめざしたい。

その土地にはこういうストーリーがある、ということが住む場所を選ぶときの決め手になる時代が来るのではないか。

その土地が
ストーリーを
持ち交流が
循環する

移住のキーワードは愛着、ストーリー、循環。地元住民も、訪れる都市住民もその土地に愛着を持つ。その土地がストーリーを持つ。交流が循環する。この3つが大事。

お客さんが来ることで、地元の人が元気になる。都会の人は普段触れることがあまりない地域の温かみに触れられる。こうした交流の循環を広げたい。

子どもたちは都会に目が向いている。大人が楽しく生きている姿を見せて、田舎はいいところだということを教えていかないといけない。

大人が地域で楽しんでいる姿を見て子どもが育てば、出て行ってもいつか戻ってくるということもあるのではないか。

子どもの頃遊んだ公園、学校帰りにいつも立ち寄っていた食堂・喫茶店、通学路の景色、漁師やおじいちゃん、おばあちゃんが井戸端会議する風景を見たときに、いいなと感じる。

大人が楽しく
生きる姿を
見て育つ

子どもたちは一旦外に出て、いろいろな技術を身につけて、地域に帰ってくる。その技術を地域で生かすということをやらないと、いつまで経っても地域は良くなるらない。

若者が進学、就職で外へ出て行くのが問題というが、自分の子どもは地元に残らず、外に出て行ける人間になってほしいと思っている親が多いのが現実。

移住で盛り上がっているところは、そこにいる人たちがどれだけ楽しんでいるかということだ。

伝統や文化を残す一方で、やりたいことが実現できる田舎にならないといけない。

下手でも自分で作り上げていける喜びがあって、それは何ものにも変えがたい。

こんなまちに
したいに
チャレンジ
できる

特色ある伝統行事を守り、自分自身の「地元」をつくるために住む人全員が主体的に関わりながら生活していく姿が望ましい。

ちょうどいい距離感でほっといてくれるまちがいい。ある意味で自己中心的に「こんなまちにしたい」にチャレンジできる雰囲気や自然にデザインされていることが大切だ。

都市からいかに若者や創造的な人材を送り込み、双方向の交流の中で、両方が良い関係になって発展していける状況をどうつくっていくかがポイント。

もはや行政が公共サービスで地域を支える時代ではない。市民が自分たちの力で地域づくりしないと地域社会が良くなる。

農作物の地産地消、堆肥なども含めたエネルギーの地産地消、デザイン・アートの地産地消など、いろんな地産地消を地域で進めていくことが大切。

自分たちの力で
地域づくり

キャンプでのたき火や住宅の薪ストーブのための薪を集めたり、有機農業の肥料を作るために落ち葉を集めたり、里山が地域で有効利用されている未来をつくりたい。

その土地の歴史や文化、風土が地域住民主導で保存・活用されているようなまちづくりがなされていることを願う。

コロナ禍でマスクの入手が困難になった経験から、地方の製造業を見直して、復活させ、生産地を地方に分散する工夫をすることの大切さを痛感した。

自然が織り成す風景や、そのまち固有の雰囲気を引き継いでいかないといけないと感じた。

ICT化が進むなかで自然と触れ合う機会が減ってきた。自然豊かな兵庫で自然の大切さを感じながら生活していきたい。

子どもを持てば、例えば、自然体験を行える場所へ移り住み、自然を肌で感じ、子どもの発育、発達に良い影響を与えるような場所で暮らしつつ、仕事を続けていくことが希望である。

自然を
肌で感じて
暮らす

田舎だからこそデザインにこだわるべき。豊かな自然におしゃれな施設があれば最強のコンテンツになる。

大事な今は今ある都市をどう変えるか。都市内にオープンスペースや自然との共生空間をどう埋め込んでいくかという話をすべきだ。

身近な自然を楽しむロングトレイルを整備しよう。

どこに行っても同じチェーン店ばかりの風景だと思う。

道を中心に人にやさしいまちを作っていきたい。

歩きたくなる
ウォーカブル
シティに

三宮をはじめとした主要駅周辺
の環境整備が肝要。

居心地が良く、歩きたくなる
ウォーカブルシティになってほしい。

「定住」を議論することに意味があるのか。住民票をどう考えるのかという話も必要。

人が減っても暮らせるまちという意味では、役所自体を少ない人数で回せる体制にすることも大事。機械にできることはどんどん機械に任せていく。

一つの自治体で完結というよりは、広域的な連携の中でどう持続させていくかを考える必要がある。

開かれた
自治体へ

もっと開かれた市役所にならないといけない。受益者負担の考え方も示しつつ、全部オープンにして、一緒に考えて決めるスタイルが求められている。

自治体が自ら変わっていかないと社会との差が開くばかりだ。

ICTを駆使して直接民主主義的な運営をめざすべきだ。

どんな産業を
伸ばす？

環境・エネルギー、デジタル、

健康・医療、航空・宇宙など

成長分野を伸ばさないと、

未来はない。

デジタルの世界でビジネスを拡大し、海外輸出に力を入れるべき。最新の医療技術も海外に輸出できる。

人材が集まらないところには世界の投資マネーも回ってこない。もう少し先見性のある産業構造の形成を考えないといけない。

先見性のある
産業構造の
形成を

水素も、航空機も、健康医療も兵庫には素地がある。

エネルギーの世界は、トップを走らないと意味がない。一番手が総取りすることになっている。

水素産業推進の大きな意義は、船舶やプラントなど、それを支える中小企業の仕事が広くあることだ。

医療産業都市について言えば、点と点の動きではなく、そこから新たなワクチンが出てくるようなスケールを持った動きをしていくべきだ。

全自動のロボット手術機の発明や、遠隔操作により操縦可能なロボット手術機の拡充が進み、地方にしながら最先端医療を受けられる時代が来るだろう。

人間中心
生命に
フォーカスを
あてる

人間中心であることが大事で、生命にフォーカスをあてるべき。人間や生命が中心であって、その周りに農業や産業がある。

健康を科学することで、長寿社会を支える新たな産業が生まれるはずだ。

スーパーコンピュータを中心とした最先端技術を活かしてより安全安心で快適なまちをつくり、日本だけでなく世界をリードできる場所になってほしい。

科学技術基盤、研究機関、人材の集積を最大限に活用し、産業界における科学技術を活用した新産業・新技術の開発促進とイノベーションの創出に向けて取り組んでいる。

ハードからソフトへ、形あるモノに依存する産業からの脱却が必要だ。

最先端技術で
日本、世界を
リードする

「多くの社会課題を持つものの果敢に現状を打破する力強い県」というブランドを構築できれば、県内外の人にとって兵庫県は魅力的な県になるだろう。

先進事例を兵庫県から生み出すことで、時代を生き抜く若者が集まる地域となるだろう。

物の消費は縮小する。少なくとも適正規模にまで落ちていく。GDPの成長は、非物質的な経済価値の増大が支えていく形になるだろう。